ゆるやかにカーブする坂を上がると見えてくる奈良大学正門。今年（2019年）は大学創立50周年の節目を迎え、アクティブラーニングの充実に向けた新校舎を建設している。

INVITATION

奈良大学
城郭考古学

過去と未来をつなぐ文化資産、「お城」の魅力を伝え続ける

城郭考古学者　千田嘉博 氏　（奈良大学 文学部 文化財学科 教授）

郡山城跡、天守台の石垣にて。千田さんの指差す隅石が転用石で、羅城門の礎石であったと伝えられる。

見どころは天守のみにあらず

「ここの石垣には、ほかの場所で使われていた石材を利用した『転用石』を多く用いています。隅にある石はもともと近くの平城京跡のもので、羅城門の礎石とも伝えられています。ほかにもお地蔵様、さらには墓石まで使っているのです」。

石垣を前に熱心に話すのは、城郭考古学者の千田嘉博さん。折からの城ブームを受け、城郭考古学の第一人者として研究活動のほかメディアに講演会にと引く手あまたで多忙な合間を縫い、奈良県大和郡山市の郡山城跡で城の見方を教えてくれた。

かつて郡山城は大和国（今の奈良県に相当）で最も大規模な城だった。築城は1580年、5年後に豊臣秀吉の弟で大和と近隣の和泉・紀伊の3国100万石を治めた豊臣秀長が城主となり、城下の町ともども大きく発展したと伝えられる。以降は城主を次々と変えながら江戸末期まで存続したが、明治に入って建物を破却し、石垣のみが残る。その後、部分的な発掘調査を行って、1980年代に追手門（おうてもん）や櫓（やぐら）を復元した。本丸の奥には天守台が残り、現在は展望施設として整備してある。

城と聞くと姫路城のような立派な天守がある姿を想像し、石垣のみでは見どころがないと思いがちだ。しかし郡山城のように、注意深く観察すれば石垣にもさまざまな発見があり、愉しめる。「建物の復元は、地面に残された柱の跡や礎石などを根拠に行います。柱の配置や太さはもちろん、軒から落ちた雨水を受けた『雨落ち溝』の位置から櫓や門の軒が、どこまで張り出していたかを正確に把握できます。ただの地面、ただの石ころ、ただの石垣ではなく、

右手が追手門、左手が追手向櫓。1980年代に市民の寄付などによって復元した。

もともとはこの場所に本丸へとつながる橋がかかっていた。「極楽橋」と呼んだ橋の再建に向け、現在発掘調査が行われている。

そこには数百年前の人々がどのように暮らし、何を考えていたのを知ることができる大切な手がかりが詰まっています」と千田さんは語る。

研究者ならずとも、石垣を眺めているだけで、大きな石を誰がどうやって運び、積み上げたのか、想像の翼が広がっていく。何百年も前の人々の息づかいがすぐそこに感じられることが、「お城」の魅力の1つなのだと気づかされる。

「好き」を深めてきた研究人生

城郭考古学は、中世から近世の城の空間構造や城下の町を対象とする、考古学の中でも新しい分野だ。「日本の考古学者の90％は縄文・弥生・古墳時代の研究者で、城郭は長い間、学術研究の対象からは外れていました。ただ、遺構が地表面や土中の浅いところにあって完全に埋まりきっていないので、主に民間の城ファンによって地表面から城を観察する調査が進められてきたのです。誰でも現地に行けば本物の城跡にふれて歴史を体感できるので人気が高まっているのですが、学問として城郭考古学を学べる大学は、奈良大学を含め、それほど多くはありません。これから発展していく分野と言えるでしょう」。

千田さんが教鞭を執る奈良大学は、奈良市の北西部、緑豊かな丘陵地に建つ。地元奈良をはじめ周辺地域に歴史遺産が多くあり、歴史や文化財の研究課程が充実、日本で最初に文化財学科を設置したことでも知られる。キャンパスの近辺にも日本屈指の大古墳群がある恵まれた環境だ。「奈良大学の学生だった頃は、『こんな近くにすばらしい古墳があるのに、なぜ君はお城なんて研究しているの』とよく言われました」と笑う千田さん。城に興味を抱いたきっかけは中学1年生の夏休み、友人との小旅行の道中、新幹線を下車した姫路駅から遠望した姫路城の姿だった。本物の美しさと存在感に感動し、それ以来、城への知的好奇心、探究心がどんどん募っていった。

考古学が盛んな奈良大学を志したのも必然だったのだろう。「当時は、お城の研究がしたいなどと言うと、変わり者と思われた時代です。高校では先生からお城ではなく高校生の勉強をするように言われ続けた劣等生でした。それが大学に入ったら好きなお城の勉強をしているだけでほめられ、突然の優等生に。大学とはなんていいところだと思いました」と冗談交じりに振り返る。卒業後は学芸員の道に進んだのち、1990年から15年間、国立歴史民俗博物館に勤めた。その間、ドイツ考古学研究所などへ留学し研究の幅を広げる機会にも恵まれ、織田信長～豊臣秀吉時代の城郭研究の成果により大阪大学で博士（文学）の学位を取得した。そして2005年に母校の奈良大学に教員として帰ってきた。「学生時代から今に至るまで、毎日好きなことを続けてきて、こうなりました」と楽しそうに話す千田さんは、奈良大学のキャッチフレーズ「『好き』を深める。『好き』が広がる。」をまさに体現する存在だ。

城郭考古学の醍醐味は学融合にあり

千田さんが「好き」を深め、発展させてきた城郭考古学。その醍醐味は、さまざまな知識をもって史・資料を総合的に読み解き、城郭や城下の全体像を解明することにあるという。「中世の城郭では残念ながら現存する建物は1つもないため、建物や堀、石垣の痕跡を発掘調査で見つけ出し、考古学の手法で読み解くことが必要です。一方で古代遺跡と異なり数多くの文献史料が残されていることから、文献史学の成果と発掘調査の結果を合わせて検討を行います。近世の城郭になると現存する建物に関する建築史学の視点、絵図や地図を正しく読み解く歴史地理学の知識も求められます。学融合的アプローチで往時の実像に迫ることは簡単ではないのですが、それこそが城郭考古学ならではの楽しさです」。

千田さんの「お城愛」にあふれる楽しい語り口に、時間を忘れて聞き入ってしまう。トレードマークともなっているお城柄のネクタイは松江城をモチーフにしたもので、全色買い占めたそう。

郡山城跡の解説を動画でもご覧いただけます。
http://www.labscope.net
Lab SCOPE WEB

最近では、レーザー計測のような新しい技術の活用も進んでいる。例えば、地表面の形状を詳細に把握できる航空レーザー測量によって、草木の生い茂った山城の本丸や二の丸、堀や石垣の形状を的確につかめるようになり、山城の研究が飛躍的に進展した。今後はデジタル技術の活用がさらに進み、情報工学との融合による研究の深化も期待される。

もちろん城郭構造の解明だけが研究の目的ではない。千田さんの代表的な研究成果は、織田信長から豊臣秀吉の時代に集権的な政治基盤をいかにして構築していったのか、彼らの拠点であった城と町から読み解いたことである。地域の中核を成した城と町のあり方は、権力構造や社会構造を反映した。そして日本列島の主要都市の多くが城下町を起源にするように、城を知ることは私たちの社会の成り立ちを考えることにつながるのだ。

未来のまちづくりの基礎として

江戸時代には城を築くのは大名だけになったが、中世には武士はもちろん、町や村の共同体、寺社などがみずからの身体と財産を守るために、それぞれ館や城を建てた。日本全国にある城跡の数は3万とも4万とも言う。膨大な城跡は、過去の歴史と社会の成り立ち、先人の知恵や営みを今に伝える地域のアイデンティティの一部であり、地域の歴史的・文化的な魅力を体感できる特別な場所になり得る。「そうなるためには城跡をきちんと調査し、その成果に基づいて、誰もが歴史を感じられる空間として整備する必要があります。それによって良質な文化観光の資源として活かすことも可能になるのです。近年、お城を核に地域の魅力向上をめざす取り組みが盛んになり、各地で城の復元・整備プロジェクトを実施中です。その基礎になるのが城郭考古学。つまり城郭考古学は、過去の社会を探究しているだけでなく、地域の歴史をまちづくりに活かしていく、未来をつくる学問でもあるのです。これから社会で果たしていく役割は、さらに大きくなっていくはずです」と、千田さんは期待を込める。

最後に、研究活動で大切にしてきたことを伺ってみた。「かつてある山城が、道路建設のために山ごと削られることになりました。そこで山城の発掘調査を行い、その成果を公開する現地説明会が開かれました。その説明会では、地元の方から『こんなすばらしい城がこの山にあったなんて知らなかった。今からでも残せないか』という声があがりました。

しかし道路は山城部分を残して完成していて計画変更は不可能。地域の方が山城の価値にせっかく気がついたのにその直後に山城は永久に失われたのです。つまり城の価値を研究者だけが理解していてもだめなのです。地域の人びとの城への共感があってはじめて、城を守り活かす道が開けます。あの山城の悲劇を心に刻んで、研究成果を学界に発表するだけでなく、いかに市民と共有していくかに、全力で取り組んでいます」。千田さんが取材や講演を通じて城郭の魅力を発信し続けている背景には、そうした強い思いがある。

城を愉しむことがブームを超えて文化として定着しつつある中で、城の保存や復元の方法も問われ始めている。城の成り立ちが当時の政治や社会の構造を反映しているのならば、それをどう守るかには、今の社会のあり方が映し出されるのではないか。地域の歴史を語る文化資産としての城を、未来へ恥ずかしくないかたちで受け継いでいくためには、行政や研究者だけに任せず、私たちひとりひとりが城に関心を持ち、価値に気づくことが大切だ。

一方でそんなふうに身構えず、公園や観光スポットとして気軽に愉しめるのも「お城」の魅力だろう。身近なお城、気になるお城を訪ねてみると、そこには心を動かされる何かがきっとある。

（取材・文　関亜希子）